

こそをかしけれ、よひも過ぬらんと思ふほどに、くつのおとちかうきこゆれば、あやしと見出したるに、時々かやうの折おぼえなく見ゆる人なりけり、けふの雪をいかにと思ひきこえながら、なんでふことにさはり、其所にくらしつるよしなどいふ、けふこん人をなどやうのすちをぞいふらんかし、ひるよりありつる事どもをうちはじめ、てよろづの事をいひわらひ、わらうださし出たれど、かたつかたのあしはまもながらあるに、かねのおとのきこゆるまでになりぬれど、うちにもともいふ事どもはあかずおぼゆる、あけぐれのほどにかへると、雪何の山にみてるとうちすんじたるは、いとをかしき物也、女のかぎりしては、さもえあかさざらましを、只なるよりは、いとをかしうすぎたるありさまなどをいひ合せたる。

〔和漢朗詠集上〕雪

曉入梁王之苑雪滿群山、夜登庾公之樓月明千里謝觀

〔枕草子下〕ふるものは

雪はひはだぶきいとめでたし、すこしきえがたになりたるほど、又いとおほうはふらぬが、かはらのめぐとに入て、くろうましろに見えたるいとをかし。

〔枕草子下〕雪いとたかく降たるを、例ならず御格子まいらせて、すびつに火おこして、物語などしてあつまりさぶらふに、少納言よ、香爐峯の雪はいかならんと、仰られければ、みかうしあげさせて、みす高くまきあげたれば、わらはせ給ふ、人々も皆さる事は、まゝり、歌などにさへうたへど、思ひこそよらざりつれ、猶此宮の人には、さるべきなめりといふ。

〔和漢朗詠集下〕山家

遺愛寺鐘歇、枕聽香爐峯雪撥簾看白居易

〔源氏物語朝顔〕冬の夜のすめる月に、雪のひかりあひたる空こそ、あやしう色なき物の身にしみ